

1. テキスト：「場所」「三」の第1段落234頁13行目から235ページ行目まで。

2. テキスト講読

意識が意識作用と一体である時、純なる作用として我は物（事）であり、物（事）は我である。あるいはむしろこれは作用以前として単に「有」の立場である。それが意識にもたらされると、物（事）を意識すると同時にそのように意識している自分を意識する。〈物（事）を意識する〉ことを意識する、のが「意識作用」を意識するということである。意識は、意識作用と一体であるところから「自己の内に退いて」意識作用を意識することによって意識作用を「内に包む」。この「意識する」はこの段階では必ずしも対象化を意味しない。むしろ対象化されないもの、あくまで地として〈感じ〉られる。デカルトの我（考えること）もカントの意識一般（私は考える）もまさにその点を捉えていた。しかし西田は、知的な意識一般はどこまでも判断主観でありながら、判断作用を超えたものでなければならぬところに矛盾を見る（239,10-11）。そうであるとするならば、意識一般は一方において意識作用であり、「対象化」される（「意識作用というものも意識一般の立場に於て見られたる認識対象に過ぎない」（233,14-15））。しかしそうなる〈意識一般が意識作用を対象として見る〉という仕方で、意識一般が意識作用として意識されることになる。こうして意識一般は「何處までも自己の内に退いて、すべての対象を内に包むものでなければならぬ」ことになる。ここには対立的無の立場と真の無の立場の矛盾とその無限交替がある。そうだとすれば、意識一般と意識作用の結合（退いて包む）もこうした無限交替の内では考えられなければならない。「無にして有を包むものを意識とするならば、無限に深き意識の意味がなければならぬ」とあるのは、対立的無の立場としての所謂意識が、意識一般を介してどこまでも深まるさまを言っている。ここでも「意識」が「所謂意識」から「意識の野」まで含めた一般的な意味で用いられている。そうして「所謂意識一般とは対立的無の立場より真の無に転ずる門口である」と述べられる。しかし「転ずる」ためには行き詰りと転換が不可欠である。無限交替は矛盾の先送りに過ぎない。門口を超えることはできない。こうした行き詰まりにおいてすでに成立しているものに目覚めるのが転換である。デカルトの我もカントの意識一般も反省の無限進行という挫折の経験の内には成立しなければならないと西田は考えるのであろう。ただし反省の無限進行が消失するのではない。無限進行の只中に成就しているものに目覚めることによって我々はすでに門口を超えているのである。

第二の問い、「単なる超越的对象」を見る意識一般と「内面的意味」を見る意識一般とは同一か否かについてはどうであろうか。「対立的有の立場に於て不可知的なる力の作用であったものは、対立的無の場所に於て意識作用となり、真の無の門口たる意識一般を越ゆることによって、広義に於ける意志作用となる」とある。また少し後に「此門口を過ぐれば、自由なる意志の対象界に入る。此世界に於ては、すべて有るものは妥当的実在であり、叡智的存在である」（234,15-235,1）と述べられている。ここからすると、結論的には同一のものが門口を越えることによって「単なる超越的对象」から「内面的意味」に転ずる、と解釈の方向性を見ることができると言える。詳しく見ていこう。

「対立的有の立場」において物の運動を統一するものとしての「力の作用」は現象を越えているという意味で、根源的にはどこまでも「不可知」である。それと同一の作用が「対立的無の立場」において感覚を統一する「意識作用」となる。ここでは例えば落下運動も意識現象となり、その運動を統一しているのは「意識作用」である。さらに「真の無の門口たる意識一般を越ゆることによって、広義の意志作用となる」。ここでは物理現象、意識現象と変異した同一の現象が意志の現象となり、それを統一するものが「意志作用」ということになる。物理学的な力と意志とを同一視するのは「万象の擬人的説明」として「一笑に附し去」（1.62,1-2）られるかもしれないが、『善の研究』では意識現象を唯一の実

在とし、しかもその根本を意志とする立場から、物理学的力は意志から類推したものだという説が採られていた（同 61,8-10）。「場所」論文のここでの脈絡ではそこまで一足飛びに主張されていない。「意識作用」は必ず「意味」を伴っており、判断作用と意志作用が常に一つになっていることの指摘に止まっている。落下運動を「見る」のも意志に基づいており、それが何等か当人にとって意味があるからだということなる。「広義に於ける意志作用」とは判断作用をも含むという意味であろう。それ故「判断作用というのは丁度意識一般の立場に於て見られるのである、判断と意志とは一つの作用の表裏と考えることができる」と述べられるのである。「意識一般」の立場において判断作用と意識作用が表裏のものとして見られる、ということである。先には対立的無の立場と真の無の立場の門口であった意識一般は、ここでは判断作用と意志作用の門口であることになる。そうして転換とは表から裏に転ずることである。

「意識一般の立場を突き詰めれば」とある。それは上述の無限交替が行き詰ることである。そうすると「何等の内容ある作用を見ることはできぬ」。そうして「認識対象界（現象界：引用者）の極まる所」に至ると言うのである。まずラスクを念頭に置きつつ「単に抽象的なる当る、当らぬという如き作用を見るのみである」とされる。「当る、当らぬ」、すなわち超対立的対象を尺度とした正誤の判断しか残らない、ということである。西田はこの判断と思惟可能・不可能とを重ねて考えているようである。「丸い四角形」は内容があっても対象はない。それ故判断としてその内容は誤りということになるが、それは同時に思惟可能でないということである。考えることはできないが、考えようと意志することはできる。それ故「丸い四角形という如きものを意識するには、背後に於ける意志の立場が加わらなければならぬ」と言われるのである。「此の如き作用（当る、当らぬという如き判断作用：引用者）の裏面には意志作用が加わらねばならぬ」とされるのである。

意識一般の立場の立場を突き詰めていって、内容なき作用（思惟可能な思惟作用）を対象とする所までは行ったが、思惟不可能な矛盾概念の前に抽象的思惟としての意識一般が躓き、その裏面の意志作用を見出した形である。西田は *ich denke*（私は考える）の *denken*（考える）を、どこまでも *denkbar*（思惟可能）なものとして理解している。それ故に思惟不可能なもの前に、そうした内容を対象とする意識作用が見いだせず、意識一般の立場が躓くのであるが、*ich denke* は丸い四角形のような思惟不可能な表象にも伴い得るのではないか。何よりもそれを〈思惟不可能〉と思惟しているのである。そうであるとするなら、思惟不可能な内容そのものを対象とする思惟作用が、意識一般に映し出されることになる。そうして映し出すこと、そのものが意識作用として対象化される。こうして無限交替が始動することになる。この無限交替において *ich denke* が躓くのは、*ich denke* を *ich denke* することができない、ということではなければならないだろう。ここにおいて初めて思惟としての意識一般が躓くことになる。意識一般が自己自身（自我自体）に躓く、ということである。

あるいは意識一般の認識対象界はあくまでもフェノメナである。フェノメナである以上、それは真実在としてのヌーメナ（理念、物自体）を志向せざるを得ない。しかるにそれを認識することは原理的に不可能である。ここでも意識一般は自らが抱える矛盾とそこから生ずる無限進行に躓くことになる。意識一般は *ich denke* としてはどこまでも現象しか知り得ず、真実在（超越論的実在）を知ることはできないにもかかわらず、そうした追求を止めることができない。畢竟 *ich denke* は *ich denke* 自身に躓くのである。しかしそうした挫折によって逆に思惟しようとする意志が顕になっている。こうして思惟（認識）の立場から意志（行為）の立場への転換がある、西田はそのように考えるべきではなかったか。かかる転換の方が「カントの意識一般はフィヒテの事行に至らねばならぬ」（259,13）事態を明らかにしえたのではないか。

テキストに戻ろう。テキストでは次いで「構成的範疇の背後に反省的範疇があると考え得るならば、反省的範疇の制約をも破ることによって、我々は随意の世界に入るのである。抽象的思惟と抽象的意志とは一つの門口の両面である」と述べられる。

構成的範疇の世界は存在的有（〈がある〉）の世界であった。そこから本体、作用（働くもの）を除去したところに「純粹状態の世界」が見られ、これが「反省的範疇の世界」と呼ばれていた。そこではすべての存在的有は繫辞的有（〈である〉）となり、本体が様

相となった世界である(228,2-7)。しかしそこではなお「反省的範疇の制約」が残っていたことになる。それが同一とか区別といった思惟可能に関する制約である。それが破られる。そうして矛盾をも意志し得る「随意の世界」に入るのである。「抽象的思惟」に行き詰り、「抽象的意志」に転ずるところ、そこが意識一般という「門口」なのである。そうして「この門口を過ぐれば、自由なる意志の対象界に入る。此世界に於ては、すべて有るものは妥当的实在であり、叡智的存在である」とされる。

意識一般は「対立的無の立場より真の無に転ずる門口である」(234,6-7)とされる。転ずることで何が達成されているかをここで振り返っておこう。意識一般の立場において「すべてが認識対象となる、理論的妥当となる」(233,10)とされていたが、これは「影像」すなわちフェノメナに関することである。妥当とは言えそれは〈経験的实在性〉に関することである。「真实在は認識対象界の後に形を潜めて、不可知なる物自体となる」(同11)とされているように意識一般にとってはフェノメナのみ認識可能であるとは言え、ヌーメナ(物自体)がどこまでも志向すべき真实在(超越論的实在)であった。かかる事態は意識一般そのものについても同様である。自我自体がどこまでも志向すべき真实在である。こうした無限進行の故に意識一般の立場自体がその矛盾に躓くことになる。無限進行は矛盾の先送りに過ぎない。〈どうにもならない〉、こうした行き詰まりがそこにすでに開けているものに目覚める機縁である。

西田の文脈では思惟不可能な対象(丸い四角形等)の前に思惟が躓き、その背後に存在する意志に目覚めるということになる。ここで矛盾した対象をも意志し得る、換言すれば「反省的範疇の制約をも破る」「随意の世界」に入るとされる。「意識一般」という「門口」を過ぎることによって、「すべて有るものは妥当的实在であり、叡智的存在である」と言われる。ここでは意識一般の認識対象であったフェノメナはすべてヌーメナに転じている。「影像」(フェノメナ)を映すだけの主客対立的な意識一般の立場に躓くことを通して、それを越えることによってすべて有るものはヌーメナとして直観されている。しかもそれは思惟可能を越えた意志の対象であるから、すでに「単なる超越的对象」ではない。それは「自由なる意志の対象」としての「妥当的存在」にして「叡智的存在」なのである。